紀要『人文・自然研究』第 17 号

リー・ハントと「詩のコックニー派」批判

江澤美月

2023 年 3 月 25 日発行
一橋大学 全学共通教育センター

人文・自然研究　第 17 号

Hitotsubashi Review of Arts and Sciences 17

2023 年 3 月 25 日発行

発行：一橋大学全学共通教育センター

186-8601 東京都国立市中 2-1

組版：精興社

リー・ハントと「詩のコックニー派」批判

江澤美月

1. はじめに

リー・ハントは、ナポレオン戦争（1804–1815）中の1808年に政治的および文化的機関誌として雑誌『エグザミナー（*The Examiner*）』を立ち上げた、ジェームス・ヘンリー・リー・ハント（James Henry Leigh Hunt, 1784–1859）の通称である。彼と同時代に急進的な活動家として知られる同名のヘンリー・ハント（Henry Hunt, 1773–1835）がいるため、彼自身リー・ハントと署名し、同時代の人たちも彼のことをリー・ハントと呼んでいた。彼はジャーナリストとしてニュース報道や議会報告、裁判報告を行うのみならず、公職就任の際、国王への忠順と国教信奉の宣誓を求める審査法（1673）により差別を受けていたアイルランドのカトリック教徒の権利回復や、当時参加資格が一部の特権階級に限定されていた議会の改革など、様々な人権擁護活動に携わり提言を行った（Roe, "Introduction" 1）。『エグザミナー』は初年度末に週2200部の発行に達し、ジョージ・ゴードン・バイロン（George Gordon Byron, 1788–1824）、ジョン・キーツ（John Keats, 1795–1821）、パーシー・ビシュ・シェリー（Percy Bysshe Shelley, 1792–1822）など多くの文人や、政治家ヘンリー・ブルム（Henry Brougham, 1778–1868）、急進的な出版者ウィリアム・ホーン（William Hone, 1780–1842）など幅広い読者を獲得している（Kucich & Cox I xxxvi）。また、同誌には文芸欄があり、キーツとシェリーは、同欄で1816年12月「若い詩人（"Young Poet"）」として紹介されている。ジェフリー・コックス（Jeffrey N. Cox）によると、「詩のコックニー派」はリー・ハントと彼の雑誌『エグザミナー』を中心に批評家ウィリアム・ハズリット（William Hazlitt, 1778–1830）やその他多くの作家、芸術家、知識人も含む緩く形成された集団であった（Cox 20–21）。

しかし、「詩のコックニー派」はリー・ハントが自認した名称ではなく、彼が「若い詩人」の中で宣言した「新しい一派（a new school）」の出現に対し、批判者側がつけた名称であったこと（Kucich & Cox II 72–73, 142）に留意する必要がある。1817年10月に、「詩のコックニー派について（"On the Cockney School of Poetry"）」と題し、人身攻撃的な批判を開始したのが、ジョン・ギブソン・ロックハート（John Gibson Lockhart, 1794–1854）を編集者とする『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン（*Blackwood's Edinburgh Magazine*）』であった。しかし、彼はZという匿名性を帯びた署名を用いたため[1]、リー・ハントにとって相手の正体が誰か不明なまま批判は続き、やがて『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』のみならず、他の保守系の雑誌、新聞でもリー・ハントの一派に対し、この名称の使用の追随が起こっている（Kucich & Cox II 142）。

「詩のコックニー派」批判は、長く階級間闘争的性質が指摘されてきたが、批判者の背景として当時政権与党であったトーリ党があることに着目したのが、エミリー・ロレーヌ・ド・モントルゼン（Emily Lorraine de Montluzin）である。彼女は1998年の論考「コックニー派の殺害、ハント、ハズリットとキーツに対する『ブラックウッズ』の武器の選択（"Killing the Cockneys: "Blackwood's" Weapons of Choice against Hunt, Hazlitt,

and Keats”)」でこの『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』による詩のコックニー派批判には1. コックニー、特にリー・ハントの気取った態度や生活様式に注目していること、2. コックニーを人間以下の存在として扱っていること、3. コックニーを害獣として扱っていること、4. 医学的、糞便学的ユーモアを用いていること、5. 敵の名誉を傷つけるために露骨な嘘を大胆に用いていること、の5つの特徴があると分析している。その上で彼女は、トーリ党のエリートが、自分たちが出自によりあるいは教育により得た社会的序列を象徴する文学の領域に、無教養な下層、中流階級出身者が参入することに対して脅威を感じたと指摘した（de Montluzin 89）。

ド・モントルゼンの分析をもとに、コックニーという言葉の含意として、労働者階級対中流階級の対立ではなく、市民対宮廷人、平民対貴族、あるいは庶民と紳士階級の対立が示唆されていると指摘したのが、上述のコックスである。コックスは、2003年にグレッグ・クシチ（Greg Kucich）と共に編集したリー・ハントの著作集で、『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』の評者Zが攻撃を始めた理由の一つとして、急進的な文筆家が保守化した「湖畔詩人派」に接近することを阻止する意味合いがあったと述べ、保守的な報道機関と、より低い階級の文化の立場から執筆するリー・ハントの一派との間に、一種の文化闘争が起きていると指摘している（Kucich & Cox II 142）。「湖畔詩人派」とは一般的にレイク・ディストリクトに住んでいた詩人、ウィリアム・ワーズワス（William Wordsworth, 1770-1850）、サミュエル・テイラー・コールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）そしてロバート・サウジー（Robert Southey, 1774-1843）を指し、第一回目の「詩のコックニー派」批判でロックハートは、ワーズワスとハントを対照的に論じている（Z vol. 2 40）。しかし、今回は特にサウジーに注目したい。それはサウジーが桂冠詩人として王室や国事を寿ぐ詩をつくる任に就く前に、急進的な詩を書いていたことが、当時「ワット・タイラ」の出版によって暴露され、彼自身のみならず政府にとっても打撃となっているからであり、その流れの中でリー・ハントはハズリットがサウジーを厳しく批判した書評を『エグザミナー』に掲載しているからである。

サウジーがリー・ハントに応答した例はほとんど知られていないが、今回上述した『エグザミナー』に掲載されたハズリットの書評の中でサウジーが、リー・ハントを批判していることが分かった。またその引用元の『エグザミナー』を参照した結果、Zの署名での投書があることがわかった。さらに第2回と第3回の「詩のコックニー派」批判の間に、リー・ハントへの手紙が二通『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』に公開されているが、その中でZがリー・ハントの政治的立ち位置を問題にしていることもわかった。以上のことを踏まえ、本稿では保守政党であるトーリ党の支持者がリー・ハントに向けて行った「詩のコックニー派」批判の意味を考察する。

2.「詩のコックニー派」批判に対するリー・ハントの抗議とZの応答

サウジーによるリー・ハント批判をみる前に、まず、ロックハートがリー・ハントの政治的立ち位置を問題視していることを確認する。彼が書いた手紙は二通あるが、いずれもリー・ハントに直接送ったものではなく、『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』誌上の公開書簡の形をとったものだった。一通目は1818年1月、二通目は同年の3月であり、日付から1817年11月の第二回目の「詩のコックニー派」批判と1818年7月の第三回目の「詩のコックニー派」批判の間に公開されたものとわかる。二通ともロックハートが先に書いたのではなく、11月16日、12月14日とリー・ハントが『エグザミナー』

誌上に掲載した公開書簡（Kucich & Cox II 142）を受けてのことだった。公開順に並べると、まず、リー・ハントが第一の手紙（1817年11月16日）、第二の手紙（1817年12月14日）を公開し、その後にロックハートの第一の手紙（1818年1月）、第二の手紙（1818年5月）が続く。特にロックハートの第一の手紙の冒頭には、「貴誌で私宛てに公開された二通の手紙」という文言があり（Z vol. 2 414）、リー・ハントの手紙への返答であることが示されている。このことを踏まえ、リー・ハントの手紙の確認からはじめることにする。

1817年11月16日、リー・ハントは『エグザミナー』で「Zへ（“To Z”）」と題し、Zが編集者である自分の品性を損なったとして抗議を行った。これは、「詩のコックニー派批判について（“On the Cockney School of Poetry”）」の題のもとロックハートがZの署名で批判を開始した翌月のことである。この時リー・ハントは、Zが匿名で行った批判の真意を問い、正体を明かさないのは臆病だからだと決めつけた（[Hunt], *Examiner* X 729）。そして冒頭で第一回の「詩のコックニー派」批判の中から次の箇所を参照している。

> 今日稀に見る天才が、衆人環視のもと自分の指を、ハント氏の詩的霊感の泉の表面に浮いている、ギトギトした悪臭の漂う猥褻さに突っ込むことなどあり得ないことだ。彼［ハント氏］の詩は、囲っている愛人を連れた男のようだ。彼の詩神は、お茶をすすっている婦人帽子店の女子販売員のように無作法に話す。もし彼女が思いつきや激情に駆られ急いでいたのなら、弁解の余地はあるかもしれない。しかし下品さは彼女にとっては不治の病で、彼女は猥褻なことを栄養不足で倒れそうになりながら話す。ハント氏をあまり知らない人が、彼の詩神は売春を繰り返してきたというのも、ごもっともである。リミニでは、家庭の幸福という最も美しい信頼関係が致命傷を受けている。作者は単純な誘惑では済まない主題、自分が姦淫と近親相姦の一部始終を楽しんで眺められるような主題を、自ら選んだのである。
>
> （Z vol. 2 40, cf. ［Hunt］, *Examiner* X 729）(2)

「今日稀に見る天才」とは、「湖畔詩人派」の一人ワーズワスのことを指すと思われる。リー・ハントがもう一か所参照しているZの批判に、次の言葉があるからだ。

> ハント氏のような品のない書き手が一体どうしてワーズワス氏の称賛者なのか、我々には説明がつかない。ワーズワスの気高い作品がひときわ光彩を放っているのは、思想に重厚さを与える清廉さや感情の父権的な明快さがあるからであり、それらで作品は一貫性を保ち染め抜かれている。　（Z vol. 2 40, cf. ［Hunt］, *Examiner* X 729）

ではZはワーズワスの作品の気高さに比べてリー・ハントの詩の何を問題にしているのだろうか。先の引用に戻ってみると、引用の下から三行目にあるリミニという言葉から、これは、ダンテの『神曲』の地獄篇にあるパオロとフランチェスカの話を扱った『リミニの話（*The Story of Rimini*）』（1816）に対する批判であり、Zは話の主題もその主題を選択したリー・ハント自身も不道徳だと非難しているように見える。実際、1818年1月にZが『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』誌上で公開した「Zからリー・ハント氏への手紙（“Letter from Z. to Mr Leigh Hunt”）」では、リー・ハントに対する批判を次のように説明しているからだ。

私はあなたの文章の次の点を批判する。

1. 学識不足や知ったかぶり。
2. 下品な書き方。
3. キリスト教に対する敬意の欠如。
4. 王権に対する侮辱や政府に対する不適切な攻撃。
5. 自分や円卓の騎士や自分自身の詩に対する過剰な称賛。
6. 何かをこれ見よがしに好むこと。
7. 下品な話題を選り好みし、リミニの詩で近親相姦の罪について不道徳なやり方で書くこと。
8. 私は、あなたがワーズワス、バイロン、そしてモアよりもかなり劣った詩人だと思っている！ (Z vol. 2 415)

このうち6、7は上で確認した第一回目の「詩のコックニー派」批判の繰り返しであり、詩の内容とリー・ハントの人となりに対する批判である。8も個人攻撃の部類である。また、1は原語で読んでいない作者の背景に対して、2は使用している言葉がコックニーであることに対する批判であり、トーリ党のエリートが下層階級の作家の侵入に脅威を感じた、というド・モントルゼンの指摘を思い出させる。5の円卓の騎士については、リー・ハントがハズリットと『円卓の騎士（*Round Table*）』で共同プロジェクトを行っている（Cox 25）からであろう。問題は、3、4と非常に政治的な事柄が批判の対象として挙げられていることである。このことは何を意味するのだろうか。

1818年5月にZが公開した第二の手紙「Zからコックニーの王、リー・ハントに宛てた手紙（“Letters from Z. to Leigh Hunt, King of the Cockneys”）」では、政治的批判色はさらに濃くなっている。

私はあなたのことを徹底的に調べ上げてやる。あなたがわかったふりをしていることは、全て知らないことなのだと証明してやる。あなたがこの10年間、本当の詩とは何かを微塵も考えずに詩を書いてきたこと、愛国主義や自由について毎週わけもなく長々と書き連ね、しかも無政府状態という異教の神の凱旋車の前にひれ伏す最も唾棄すべき虜であることを私は示すつもりだ。 (Z vol. 3 201)

この手紙が書かれたのは1818年なので、「この10年間」とはリー・ハントが『エグザミナー』の編集を開始した当初からになる。また、『エグザミナー』でリー・ハントが展開してきた愛国主義や自由についての議論に否定的であることからも、Zはリー・ハントとこれらに対する見解が異なることを示している。しかもZは、その是非を決めるのは自分たちではなく読者であるとして次のように述べている。

リー・ハントとZとの間で論争中の問題は、あなたが大声を出して訴えることによっても、私が蔑むことによっても解決しない。それはあなたの作品を読んだ人に課された仕事であり、私がその人たちに対し必要に応じて行ってきた非難によって決まるだろう。 (Z vol. 3 200)

つまり、Zはリー・ハントの思想に共感して一派を構成している人への攻撃が重要であると考えている。そして「詩のコックニー派」批判を展開したZに苛立っているリー・ハ

ント本人に対しては

> あなたは非常に多くの人の名誉棄損を行ってきたのだから、自分自身が復讐の魔手から逃れられると思うのは間違いである。 (Z vol. 3 200)

と宣戦布告を行っている。気になるのはZが「復讐」という言葉が用いていることである。先に確認したように、Zはリー・ハントがワーズワスを称賛していると考えているのだからワーズワスではない。これは誰に対し何を行った復讐だろうか。

3. サウジーの「ワット・タイラ」と「詩のコックニー派」

そこで「湖畔詩人派」のサウジーの詩「ワット・タイラ（*Wat Tyler: A Poem*）」を巡る論争が「詩のコックニー派」批判が始まる前に起きていることに注目したい。フランス革命当初、革命に共感した「湖畔詩人派」が、革命が激化するにつれ保守化したことは知られているが(3)、サウジーの存在がこの時期特に重要であるのは、彼が桂冠詩人であり、王室および政府側の立場を代弁する立場にあったからである。1817年当時の政権与党は、1793年フランス革命（1789-99）への干渉戦争を開始し、革命崩壊後台頭したナポレオンとの戦争（1804-1815）に勝利したトーリ党であり、サウジーが桂冠詩人になったのは、ナポレオン戦争中の1813年だった。この時、かねてからサウジーがフランス革命を称賛する詩を執筆していることを高く評価していたリー・ハントは、サウジーが桂冠詩人になることに強く反対し、着任に際しては厳しく批判している（Kucich & Cox II 296）。

しかし1817年に公開された「ワット・タイラ」は、サウジーが自身の民主的な熱が最も高かった1794年の夏に執筆した詩（Carnall 20）だった。フランス革命の激化に伴い与党のトーリ党のみならず野党のホイッグ党議員の多くが、エドマンド・バーク（Edmund Burke, 1729-97）の『フランス革命についての省察（*Reflections on the Revolution in France, and on the Proceedings in Certain Societies in London Relative to that Event*）』（1790）の見解を支持し、既存の制度を根本的に否定することの危険性を感じていた中で（川北262）、サウジーがフランスではなく、しかも自国イギリスのワット・タイラの一揆（1381）に想を得た詩を執筆したことは、いかに扇情的であったか想像に難くない。しかしサウジーが執筆当時出版者に渡した原稿は、印刷されなかったので（Southey 238-239）、社会に与える影響は殆どなかったと言える。

それが、1817年2月13日にサウジーの意図とは裏腹に突然出版されたのである（Southey 237）。この頃の社会状況を概観すると、前年の1816年に穀物法と不作による不況が起こっていたことに加え、終戦により多くの兵士が復員したため、失業者が増え、民衆の不満が高まっていた（川北272-273）。1816年12月のスパ・フィールズ暴動はこうした中起き、1817年の1月28日には、議会へ向かう摂政の馬車が襲撃される事件が起きている。リー・ハントは政府による取り締まり強化を憂慮し、すぐに1817年2月2日の『エグザミナー』で、今はフランス革命下ではないから心配するには及ばないと、事態を鎮静化させる方向に論を進めている（Hunt, *Examiner* X 66）。しかし首相スペンサー・パーシヴァル（Spencer Perceval, 1762-1812 首相 1809-12）の暗殺後組閣されたリヴァプール政権は、革命の前兆ではないかと恐れ、これを機に国民が裁判を受ける権利を保障する人身保護条例の停止を議会で検討した（Kucich & Cox II 96）。それに対しリー・ハントはマグナ・カルタ以来国民に与えられてきた権利が侵害される可能性があるとして、3

月２日の『エグザミナー』で、停止を庶民院に図った政府庶民院指導者のカースルレー卿（Viscount Castlereagh, 本名 Robert Stewart, 1769–1822）に対し、激しく抗議を行っている（Hunt, *Examiner* X 129–130）。

この人身保護条例の停止反対を行った同日に、リー・ハントは、サウジーを批判するハズリットの無署名の論考「ワット・タイラ　民主的な詩、『クォータリー・レビュー』議会改革について（*Wat Tyler: A Democratic Poem, The Quarterly Review: Article, "On Parliamentary Reform"*）」（1817）を『エグザミナー』に掲載した。サウジーが現職の桂冠詩人であることを考えると、政権に対するアピール度はかなりのものであろう。この表題に掲げられている『クォータリー・レビュー』の論文とは、サウジーが執筆し『クォータリー・レビュー』に無署名で掲載されたもので（[Southey] 225, cf. Madden 233）、議会改革を推進する一連の論考に対し批判を行ったものだった。ハズリットは、まず詩と論文のいずれも作者がサウジーであるとしたうえで、「ワット・タイラ」の作者は超過激共和主義者であるが、『クォータリー・レビュー』掲載論文の著者は超王党派であり、全く異なる立場をとっていると指摘している（[Hazlitt], "Wat Tyler" 157）。さらにハズリットは次のようにも述べている。

> 一方は権力の濫用に危機感を募らせ、他方は濫用への抵抗に恐れしか感じない。一方は概して無政府状態へと突き進み、他方は概して独裁主義に進んでいる。一方は王、聖職者、貴族を悪しざまに言うが、他方は民衆が悪いのだと考える。一方は普通選挙と完全なる平等に賛同し、他方は議席の売却と王権の拡大に同意している。一方はジョン・ボールの説教を称賛するが、他方は人身保護条例の停止を推奨し、『エグザミナー』に対しては剣や短刀や親指を締め付ける拷問具を用い、力づくで、ペンを折らせようとする。なぜならサウジー曰く、同誌をペンで止めるのは至難の業だからだ。
>
> （[Hazlitt], "Wat Tyler" 157–158）

引用の下から四行目に登場するジョン・ボール（John Ball, –1381）は、ワット・タイラの一揆を指導し、処刑された聖職者である。このことからわかるように「一方」とは「ワット・タイラ」を、「他方」とは『クォータリー・レビュー』の論文を指す。つまりハズリットは、サウジーがかつてフランス革命の影響を受け、普通選挙と平等を唱道する詩を作成していたにも関わらず、今では政府の言うなりに人身保護条例の停止を奨励し、言論を弾圧する側に回っていると批判したのである。

ハズリットが引き合いに出したサウジーの論文は、1816 年 10 月の『クォータリー・レビュー』に掲載されたとの指摘がある（Madden 233）ので、実際にその論文を参照すると、サウジーは、貴族を政府から排除することは国家の損失であると述べ（[Southey] 272）普通選挙への反対を表明している。さらに彼は『エグザミナー』から引用し、同誌に対する批判を行っている。

> 人類を破滅に導く様々な仕組みの中で、報道機関が最も恐るべき力を持っている。フランスで革命家たちが、そしてその当時イングランドで革命家たちが、その扱い方を誤った時にはそうであった。最近の事件に対し報道機関が用いた言葉を見て、これほど欺瞞に満ち、これほど煽動が大胆になされていたことが、かつてあったかどうか顧みてほしい！　『エグザミナー』は次のように述べている。「おそらくどこかの酒場で陰謀が練られたのだろう。冷遇の末、錯乱状態に陥り、酒場で数人の煉瓦職人と共謀

したデスパードの陰謀はそうだったが、そのため彼は自分の仲間の身代わりになり、自分自身が絞首台に送られたのだ！」この破廉恥な煽動者は続けて「我々はプラット氏が受けた傷を気の毒に思い、彼を殺害しようとした者は（もしその人が餓死寸前で、錯乱状態にあったわけではないのならば）悪党だと思う。しかし瀟洒な暮らしをしている冷酷な贈収賄者は、非常に過激な事、もっと酷い悪党を唆す事さえ可能なのだ！」と、あらゆる「悪党」のうち、下手人ではなく、暴動や反逆罪や殺害の根本原因を探らず表面的に言い繕う者たちが、あたかも一番悪いかのように述べている。

（[Southey] 273、強調は原文によるもの）

ここでサウジーは『エグザミナー』を、政府を批判する急先鋒の煽情的な雑誌であると批判している。それは、リー・ハントが過去の大逆罪の冤罪事件を最近の事件にオーバーラップさせ、事件の見直しを求めているからである。この時サウジーが引用した『エグザミナー』の記事は、1816 年 12 月 8 日に掲載された「都市の暴動（“Disturbances in the Metropolis”）」である（Hunt, *Examiner* IX 769–770）。この場合の暴動とは、サウジーが最近の事件だと述べていること（[Southey] 273）、引用中の被害者名がプラットであること（Kucich & Cocks II 374）、そしてサウジー自身がウィリアム・コベット（William Cobbett, 1763–1835）の『ポリティカル・レジスター（*Political Register*）』を元に説明している（[Southey] 273）ことから、1816 年 12 月に起きたスパ・フィールズ暴動についてだとわかる。引用にある「デスパードの陰謀」とは、1803 年に起きたエドワード・マーカス・デスパード（Edward Marcus Despard, 1751–1803）の大逆罪の冤罪事件を指し、『エグザミナー』は、この事件とスパ・フィールズ暴動の背景には、ともに失職という共通項があることに注目している。先に触れたようにスパ・フィールズ暴動には、戦後不況のため除隊された兵士や船員が巷に溢れていたという背景がある。一方デスパードは、アイルランド出身の軍人で、フランス革命（1789–1799）が始まる 20 年ほど前の 1766 年にイギリス軍に入隊し、ホラチオ・ネルソン（Horatio Nelson, 1758–1805）と共にスペイン遠征を行い、1786 年ホンジュラスの総督に任命されたが、突然解任される（Stephens 1）[4]からである。さらにリー・ハントは、デスパードに言及することで、スパ・フィールズ暴動の首謀者として処刑された船員もまた冤罪の可能性があることを示唆している。サウジーが『エグザミナー』よりも踏み込んでいるとするコベットは「主に飢餓状態にあった船員が構成員であった暴徒は、不法に武器を所持していたものの、誰かに危害を加えたわけではなかった。」と説明している（[Southey] 273）。しかし、デスパードへの言及がある引用元の『エグザミナー』を探すと（[Hunt], *Examiner* IX 772）、リー・ハントは同じ日の別の記事で、船員が何者かにマスケット銃を手渡されたという証言を掲載している（[Hunt], *Examiner* IX 779–780）。従って彼はコベットよりもさらに踏み込み、冤罪をほぼ確信していると言える。さらにデスパードの逮捕は、ナポレオン戦争中の人身保護条例の停止下で起き、証拠不十分であったにも関わらず、政府の意向で処刑が敢行されたことも（Stephens 2）見逃せない。つまり、リー・ハントは船員の無実を主張するのに留まらず、人身保護条例の停止そのものが危険であることを主張しているのである。サウジーが『ポリティカル・レジスター』よりも一見穏健に見える『エグザミナー』を煽情的な雑誌の筆頭に挙げているのは、このことを考慮に入れてであろう。

さて、リー・ハントがデスパードに言及した翌週 12 月 15 日の『エグザミナー』に、翌年『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』誌上で「詩のコックニー派」批判を開始する Z と同じ署名の人物の投書が掲載されていることが今回の調査でわかった。Z は

「正義の宣告（“Administration of Justice“）」の題のもとに次のように述べている。

> 『エグザミナー』氏よ　有罪宣告を受けた犯罪人の罪がいかなる性質のものであれ、その人の黙秘を非難するのは人道的にためらわれる。それは黙秘する人には有利と思われるかもしれない。しかし、時に関しても内容に関してもこの黙秘があり、他の死刑執行による死が原理原則に反しない場合、瞠目した民衆は当然のことながら疑問を持ち、比べたり調べたりするだろう。
>
> 例えば
>
> 最も許しがたい罪は何だろうか――殺人。何が殺人者に最も唾棄すべき性質を与えているのだろうか――計画性。最もさもしい動機は何か――報酬、あるいはヴィカリー・ギブズ様がかつて語ったように、双方から報酬を得た後――見下げ果てた誘惑。正義の威信や尊厳に対し最も致命的な打撃を与える動機は何か――法の名のもと法の見せかけのもとに犯行を行うこと。
>
> 『エグザミナー』よ、月曜に処刑された者たちは、直接的にも間接的にも殺人犯ではなかった。その者たちは、卑劣なわけでも、馬のように食みをかまされているわけでも、虎の威を借る狐でもなかった。彼らは、絞首刑に処するために路上にいる困窮した貧困者を使ったり、同様の愉快な予想のもとに子供たちに強盗をさせたり、登記者が30年間口を噤んで来た、人を毒殺する試みを行ったりしなかった。手短に言えば、彼らの大半は略奪者であり、鬣（たてがみ）になびいていたのである。
>
> （Z, *Examiner* IX 795、強調は原文によるもの）

今日スパ・フィールズ暴動は、政府の諜報員、ジョン・キャッスル（John Castle）が暴動に駆り立てたことが指摘されており（Kucich & Cox II 76）、リー・ハントが『エグザミナー』で展開した主張は正しかったとわかるが、ここでZは、サウジー同様、『エグザミナー』が事実を故意に曲解し、政府批判に導いていると批判している。最初の段落でZは、『エグザミナー』の断定を避ける報道が民衆に真実だと思っていることについての再考を促し、疑義を正させている、と述べている。次の段落に出てくるヴィカリー・ギブズ（Vicary Gibbs, 1751–1820）は、フランス革命時の人身保護条例の停止のもと煽動容疑で逮捕されたホーン・トゥック（John Horne Tooke, 1736–1812）やトマス・ハーディ（Thomas Hardy, 1752–1832）の無実を導いた敏腕の法律家である（Barker 1, Davis 12）。その同じギブズは、司法長官に就任して後の1808年から1810年には、報道機関の取り締まりに終始し、リー・ハントも告発の対象となったことがあった（Barker 2）。したがって、Zは、下手人とされた船員の冤罪を主張する『エグザミナー』を、報酬次第で急進主義者にも保守派にも有利な判決を出せるギブズのようだと皮肉を言い、節操のなさを読者に印象付けている。これはリー・ハントに対し、取り締まり対象となる警告を行っているともとれる。

次の段落でZは、処刑が殺人者ではなく略奪者に対して行われたと偽の情報を流すことで、読者による『エグザミナー』への信用の失墜を図っている。その一方で、貧困者に犯罪を教唆したり、犯罪者に仕立て上げたり、彼らを標的として犯罪を行うことはない、と政府の関与を否定することも忘れていない。

サウジーそしてZが躍起になってリー・ハントが呈した疑念を払拭しようとしていたのには訳があった。それは、リー・ハントがスパ・フィールズに集まった群衆は、普通選挙を求めて集まってきた民衆であって暴徒ではない、という態度を崩さず、依然として議

会改革は必要であるという姿勢を崩していないからである（Kucich & Cox II 76）。彼はサウジーが先に引用した『エグザミナー』の同じ記事の中で次のように述べている。

> 過激な現状を嫌う人は、国民一人一人の生活を気にしないし、一人の集合体である何千人もの人の生活も気にしない。その人たちの最近の政治や以前の見解を見れば、そのようなことは眼中にないことがわかる。ところがその人たちは、自分たち自身の生活のことは非常に気にし、自分たちの名誉職、議席買収、お互いの金銭の授受や媚びへつらいには非常に関心がある。その人たちには過剰な自己中心癖がある。したがって、過激さを嫌うという尤もらしい理屈のもとに、彼らは改革を頓挫させ、自身が収賄により得た収益の損失を隠し、我身可愛さのために言い繕ったという不面目を隠すのである。（Hunt, *Examiner* IX 770）

ここには国民一人一人の生活は眼中になく、自分たちの私利私欲に熱心な議員の様子が語られている。そしてその状態を維持するために、民衆の「過激さ」を利用して改革を阻む構造があることを、リー・ハントは見抜いている。さらに彼は、これはイギリスに限った問題ではないとして、次のように述べている。

> イギリス憲法をないがしろにする道義的に弱い者たちは、政治的な主張や民衆が体を張って行う要求さえ気にしないようにしてきた。同盟国、すなわち別の道義的に弱い者たちは、自分たちがヨーロッパ全体に対し取り交わした約束を反故にしてきた。したがって両者ともあるべき姿に戻る必要があるしそうなるだろう。
>
> （Hunt, *Examiner* IX 770、強調は原文によるもの）

リー・ハントはヨーロッパの王国は皆国民のことを顧みないでいると述べている。ここで彼がいう同盟国とはナポレオン戦争を共に戦ったイングランド、オーストリア、ロシアを指す（Kucich & Cox II 375 n. 14）。したがって、リー・ハントは、ウィーン会議後、ヨーロッパ各地で専制政治が復活し、いわゆる保守反動が起きたことを批判している。しかし、彼は同盟国が約束を反故にしてきたと述べ、同盟国には国民を支援する意図があったとすることで、同盟国が自ら改革する余地を残していると言える。

話をハズリットによるサウジー批判に戻すと、当時サウジーは現役の桂冠詩人であったため、「ワット・タイラ」と『クォータリー・レビュー』の議会改革反対論の矛盾を指摘したこの論考は、サウジー自身のみならず、政府にとっても大問題だった。『エグザミナー』でハズリットに批判されたサウジーは、次に庶民院で改革派の議員、ウィリアム・スミス（William Smith, 1756-1835）により追及を受けることになるからである。一方リー・ハントは、1817年3月16日の『エグザミナー』でこのことを報じるにあたり、スミスによる追及が「煽動的な集会に関する法案」を審議する際になされたことを指摘し、政府による取り締まりがまた一歩進んだことを伝えている。そして「ワット・タイラ」を書いたことを弁解するサウジーを「ひどい背教者」であると厳しく批判した（Hunt, *Examiner* X 172）。

ここで重要なのは、『エグザミナー』は方針として、サウジーによる「ワット・タイラ」の執筆自体を、批判の対象にしていないことだ。翌週リー・ハントは「クーリエと「ワット・タイラ」（The Courier and “The Wat Tyler”）」と題するハズリットの無署名論文を掲載した（Hoadley 88）。ハズリットは1817年3月30日の『エグザミナー』で、別の

「湖畔派詩人」コールリッジが、サウジーは「ワット・タイラ」を執筆した19歳当時のことを忘れてしまったと擁護したのに対し、次のように反論している。

> 彼［サウジー氏］の「ジャンヌ・ダルク」、「ソネット」と「銘刻」、スペインとポルトガルからの手紙、コールリッジ氏の「火災、飢饉、虐殺」も収録されている年刊アンソロジー、これらは皆、王や聖職者や貴族に対する一連の激しい批判であり、フランス革命を寿ぎ、戦争や課税に反対している。この傾向は、1800年まで続いている。
> （[Hazlitt], “The Courier” 195）

1800年とはサウジーが政府の年金の受給を開始した年である（[Hazlitt], “The Courier” 195）。ハズリットはサウジーの政治姿勢が直ちに変化したわけではなかった証左として作品名を挙げている。さらに彼はサウジーを擁護したコールリッジも同様だと述べている。その上でハズリットは、コールリッジの説明を引用し、次のように述べた。最初の七行がコールリッジの説明部分である。

> サウジー氏は「ワット・タイラ」を書き過激な共和主義の思想を胸に抱いていた頃、少年に過ぎませんでした。子供でしたから、奴隷制度、迷信、戦争、飢饉、流血の惨事、税金、収賄、政治的腐敗、議席買収が行われた選挙区、住居と年金を衝撃的な事柄と受け止め考えました。今彼は大人になりましたので、子供じみたことはやめ、奴隷制度、迷信、戦争、飢饉、流血の惨事、税金、収賄、政治的腐敗、議席買収が行われた選挙区、住居と年金、そして特に自分自身のことを考えることほど愉快なことはないと思っています。
>
> 答え。しかし、コールリッジ氏は彼［サウジー氏］が「ワット・タイラ」を書いた頃、天才であったと我々に語っている。サウジー氏がこの詩を書いた時、賢人であったことは間違いないが、それ以来常にそうであったかは、我々の関知しないところである。
> （[Hazlitt], “The Courier” 196）

ここでコールリッジが列挙している事柄のうち特に収賄、議席買収が行われた選挙区そして「自分自身のことを考えることほど愉快なことはないと思っています。」という言葉は、リー・ハントがスパ・フィールズ暴動を論じた時に特権階級を批判するのに用いた言葉と酷似している。したがってコールリッジがいう「大人」とは特権階級のことであり、彼らはサウジーが「子供」であった頃、見て衝撃を受けた戦争や飢餓による悲惨さや政治的堕落は見て見ぬふりをしていると分かる。一方、ハズリットは、「ワット・タイラ」を書いた、コールリッジの言う「子供」の頃のサウジーを高く評価し、リー・ハント同様自らも、世の中の悲惨さや政治的堕落をなくそうと試みている。つまり、ハズリットにとって「子供」とは、未熟さを示すのではなく、ありのままの状況を受け止めることが出来る無垢な状態なのだ。

4.『エグザミナー』におけるサウジー批判の影響

最後にリー・ハントが『エグザミナー』で展開したサウジー批判の影響について考察したい。これまでリー・ハントが掲載したハズリットの論文で、サウジーとコールリッジの

行動には、かつての急進性においても現在の保守性においても類似性があることが確認された。『エグザミナー』の読者の中で、同じくこの二人の現在の保守的な傾向、つまり特権階級寄りであることを指摘したのが、翌週4月6日掲載の「コールリッジ氏とサウジー氏、編集者への手紙（“Mr. Coleridge and Mr. Southey: To the Editor of the Examiner.”）」を投稿したヴィンデックス（Vindex）である。

> 同様の宗教的背教を示している点では「民衆への請願（*The Coniciones ad Populum*）」の作者と「ワット・タイラ」の作者は刎頸の友である。彼らは二人ともさもしく傲慢で、最も称賛されるべき愛国的な物の見方をする人や、最も明快な見方をする人や、最も啓蒙的な憲法の知識を持った人を悪しざまに述べる。彼らは共に「教会と王」という昔からある忌まわしい叫び声をあげる。彼らは共に「豚のような大衆」や「教会の敵」という言い回しを繰り返す。彼らは共に人間の理性と良心に迷信という暗黒時代の錆付いた足かせをはめる。彼らは共に全ての者を対象に、政治信条の別なく不忠誠の烙印を押し、非国教徒を追い出し、ユニタリアンをさらし台にさらしている。（Vindex 211）

「背教」という言葉から、ヴィンデックスは、リー・ハントがサウジーの急進主義から保守主義への転向を「背教」という言葉で表現したことを踏襲しているとわかる。異なるのは、ヴィンデックスがこの言葉に「宗教的」という形容詞をつけ、宗教的不寛容性に対する批判としていることだ。

これが単に宗教上のことに留まらないことを考察する前に、ヴィンデックスが「豚のような大衆」という言葉を引き合いに出していることに注目したい。「豚のような大衆」は、『フランス革命についての省察』でフランス革命を批判したバークの言葉である。彼は貴族と聖職者が学問の保護を行ってきたと述べた後で次のように予見している。

> 学問は、その自然的な保護者と案内人を失った途端に、豚のような大衆の足元で泥土の中に踏みにじられるだろう。（中野（上）145）

この引用には「学問」に原注があり、バークは例えば、ジャン＝シルバン・バイイ（Jean-Sylvain Bailly, 1736–93）のことを指すと説明している（Hampsher-Monk 81）。バイイは、フランスの天文学者で、フランス革命当時、第三身分の国民議会議員が憲法制定まで解散しないことを誓った「テニスコートの誓い」で議長を務め、パリ市長になった。しかし後に、シャン＝ド＝マルス事件で、逃亡したルイ16世（Louis XVI, 1754–93, 在位1774–92）の退位を要求して集まった民衆に向け、国民衛兵隊に無警告で発砲させた責任を問われ、処刑された。従って、ヴィンデックスが『エグザミナー』への投書で、サウジーとコールリッジに対し、「豚のような大衆」という言葉を繰り返し用いているという時、バークが表現した「民衆への脅威」に加え、二人は民衆への軽視に留まらず民衆への裏切りにより処刑されたバイイに匹敵する、という意味合いが含まれることになる。

この大衆に対するバークの比喩を用いたのではないかと思われるのが、Zが1822年に第7回目の「詩のコックニー派」批判で、リー・ハントに対して行った批判である。この時Zはリー・ハントに対し「コックニー派の王」（Z vol. 8 778）という呼称を用いているが、同じ批判の中に次のような一節がある。

もし彼［ハント］がローマ行きを敢行するなら、我々は彼を暗殺するため食用豚を差し向けよう。食用豚はベグビーの殺人を自負しているからである。「もし食用豚がハントを、ポンペイウスの像の足元で刺したら」どれほど清々することか。

（Z vol. 8 780、強調は原文によるもの）

ローマにおけるポンペイウス像の足元での暗殺から、Zはカエサル（Julius Caesar, 100–44 B.C.）の暗殺を念頭に置いていると考えられるが、問題はリー・ハントが食用豚に暗殺されるという設定である。豚は先程のバークの引用から、民衆の比喩と考えられるがなぜZは、リー・ハントを他の動物になぞらえている（cf. de Montluzin 99）のに、この時豚にはなぞらえず、支配者になぞらえているのだろうか。

その理由は、先程来確認しているように、リー・ハントが一貫して民衆の側に寄り添っているからであろう。このことは彼が1818年8月30日の『エグザミナー』に、リチャード・ポーソン（Richard Porson, 1759–1808）の『あらゆる場所に携行が求められるハンプシャー住民のための新公開問答（*A New Catechism for the Use of the Natives of Hampshire: Necessary to be Had in All Sites*）』（1792）の全文掲載を行っていることからもわかる(5)。バークと同時代の古典学者ポーソンは、バークの「豚のような大衆」に反発したことが知られるが、『新公開問答』は次のようにして始まっている。

問い　あなたの名前は？　答え　食用豚、もしくは豚です。
神があなたを食用豚にしたのですか。 いいえ、神はわたしをご自分にかたどって造られました。崇高と美閣下が私を豚になさったのです*。

（[Hunt], *Examiner* XI 548、註は原文によるもの）

「崇高と美閣下」とは、『崇高と美の観念の起源（*A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful*）』（1757）の作者、すなわちバークのことである。つまり、ポーソンはバークが「豚のような大衆」と述べたことによって、民衆は豚になったと皮肉を言っている（Spencer No. 5305）。またリー・ハントは、この箇所に註をつけ、読者に『フランス革命についての省察』を参照するよう促している（[Hunt], *Examiner* XI 548）。

『新公開問答』には、民衆の比喩である豚が、いかに上流階級の比喩である人間に搾取されているかを示す次のような部分もある。

食用豚の権利は何ですか。 人間によって鞭打たれ、血を流すことです。
人間の義務は何ですか。　食用豚を鞭打ち、血を流させることです。

（[Hunt], *Examiner* XI 550）

ここには厳然とした階級の差が示されている。では、一旦豚にされた人間は再び人間には戻れないのだろうか。『新公開問答』では、そうではないが、人間に戻るには儀式が必要であることが示されている。すなわち、唯一の人間である監督長（Hunt, *Examiner* XI 548）により、過去および未来永劫にわたって服従する印として、鉄の焼き串で肩を叩かれ、情け容赦なく殴られることが求められるのだ。この時、殴られる豚が、監督長にあまりの辛さに憐みを乞い、かつて自分も豚だったことを思い出してほしいと嘆願すると、自分が食用豚であったことを忘れた監督長はそのことを否認する、というくだりがある

(Hunt, *Examiner* XI 550)。ポーソンがこれを書いたのは1792年であり、リー・ハントがこの問答集を『エグザミナー』に掲載したのは1818年だが、この監督長の姿は、フランス革命で立ち上がった民衆に共鳴した「少年」のサウジーが「大人」になり、かつての自分が共鳴したことを否認している姿と重なって見えないだろうか。

『新公開問答』でもう一つ気になることは、豚から人間になるには恭順の意を表す儀式が必要であることだ。ここで平民の出身であったポーソン（Spencer No. 5295, No. 5357）が、才能によりイートン校、そしてケンブリッジ大学に進学したものの、国教会に属さず平信徒であったために、トリニティ・カレッジのフェローになれなかったその時期と、この作品の執筆時期が重なっていること（Hoppner 4, Spencer No. 5369）に注目したい。つまりこの儀式は、国教会への恭順を示す英国国教会の信仰三十九箇条を思わせるものである(6)。

民衆に寄り添っていたリー・ハントは、王権および国教会に対しこの時どのような見解を示しているのだろうか。彼はポーソンの『新公開問答』を『エグザミナー』を掲載するのに先立ち、1817年4月13日、連載中の記事「古き良き時代の歴史概要（“Sketch of the History of the Good Old Times“）」の中で、支配者層はしばしば民衆を犠牲にして政争を行ってきたと指摘している。彼は、カトリック教徒とユグノーが対立して聖バーソロミューの虐殺（1572）が起きた時、フランス王シャルル9世（Charles IX, 1550–1574）は対岸へ避難しようとした民衆に火を放ったことをその一例として挙げている（[Hunt], *Examiner* X 230)。さらにリー・ハントは、宗派を問わず、宗教を政治的に利用することに対して反対しているとも言えよう。

ロックハートが1818年に『エグザミナー』を読んでいたことは、彼が『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』誌上で公開したリー・ハントへの手紙でわかるが、この問答集の掲載をみた彼は、この問答集がリチャード・カーライル（Richard Carlie, 1790–1843）によって直ちに出版され（Roe, *John Keats* 99)、シェリーによって劇詩「オイディプス・ティラヌスー暴君スウェルフィット（“Oedipus Tyrannus; or, Swellfoot the Tyrant”）」（1820）へと結晶する（Barnard 72–73）様を目の当たりにして、その影響力を空恐ろしく思っただろう。そこで彼はリー・ハントを豚になぞらえて民衆と共に歩ませるのではなく、両者の分断を願い、カエサルであるリー・ハントが、食用豚である民衆に暗殺される、という比喩を用いたのだと考えられる。もとよりロックハートは、民衆の権利を代弁してきたリー・ハントにとって、権力者になぞらえられることは最大の侮辱であることを考慮に入れている。

5. おわりに

「詩のコックニー派」批判は、フランス革命後の保守反動を背景に、雑誌『エグザミナー』の編集者であったリー・ハントおよび彼の支持者に対し、当時政権与党であったトーリ党の支持母体の一つ『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』が、国家観、宗教観の是非を巡り、1817年10月、Zの署名のもとに仕掛けたものである。今回、批判初期の1818年1月と5月にZがリー・ハントに宛てて『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』誌上で公開した書簡に注目することにより、Zが『エグザミナー』で展開されていた王権や政府に対する批判、宗教観を問題視していることが明らかになった。また彼は、サウジーと同じ見解をもっていることが、サウジーが1816年『クォータリー・レビュー』で展開したリー・ハントの議会改革論に対する批判とそれに関連してZが行った『エグ

ザミナー』への投書から確認された。従って、第一回の「詩のコックニー派」批判が起きる前、リー・ハントが政府による人身保護条例の停止に反対するのと合わせ『エグザミナー』に掲載した、ハズリットによるサウジーの「ワット・タイラ」論は、同詩と上述の議会改革論批判を比較していることからも、サウジーそしてＺの批判に対する反論と考えられる。

1817年当時桂冠詩人として、政府の意向を代弁する立場にあったサウジーは、特権階級の既得権益を護るために普通選挙に反対し、スパ・フィールズ暴動に見られるような議会改革運動を抑えるために人身保護条例の停止に加担し、言論を統制する方向に向かっている。その根底にあるのは、バークが『フランス革命についての省察』で示した「豚のような大衆」すなわち、改革を求める民衆に対する恐怖である。

一方、リー・ハントは、特権階級が、私利私欲に走った結果が政治の腐敗を招いていること、それを是正するためには普通選挙による議会改革が必要であると考え、自由な議論が担保されるためにも、人身保護条例の停止に反対している。彼はバークの「豚のような大衆」を批判したポーソンの『新公開問答』を広め、支配者層による民衆抑圧の構造が存在することを明らかにしている。

また宗教に関し、サウジーは国教会の信仰以外は排斥しているが、リー・ハントは、国教徒、非国教徒の別なく享受できる社会を理想とした。

以上のことから、「詩のコックニー派」批判は、ド・モントルゼンが指摘する文学上の階級闘争や、コックスが指摘する「湖畔詩人派」を巡る文化闘争に留まらない。この批判は、国王や特権階級を中心とした国家ではなく、非国教徒も含めた一般国民のための国造りを普通選挙によって実現しようとするリー・ハントおよび彼の支持者の価値観に対し、それを既存の政治観および宗教観への攻撃と感じたトーリ党の支持者たちが行った批判と考えられる。

註

（1）エミリー・ロレーヌ・ド・モントルゼンは、ロックハートの他にジョン・ウィルソン（John Wilson, 1785-1854）や、ウィリアム・マギン（William Maginn, 1793-1842）が批判に加わっていたと指摘している（de Montluzin 87）。

（2）リー・ハントの引用では、三行目の「彼の詩神」が「彼」になり、リー・ハント自身への批判の意味合いが強くなっている。また、下から四行目の「ハント氏を」以降はリー・ハントのみならず彼の妻に対する名誉棄損となっている（[Hunt], *Examiner* X 729）。リー・ハントは、同年同月『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』のロンドンでの代理人であるボールドウィン、クラドック＆ジョイ社に対し、酷い個人攻撃を行ったとして、法的手段に訴えると抗議し、同社は同誌の代理人を辞める結果となった（Reiman VI 743）。

（3）例えばGeoffrey Carnall, *Robert Southey and His Age: The Development of a Conservative Mind*（Oxford: 1960）参照。

（4）H.M. スティーブンズ（H.M. Stephens）は、この時デスパードに対する偽の誹謗中傷があったと指摘している（Stephens 1-2）。

（5）ジョン・バーナード（John Barnard）はこの作品の写しが、リー・ハントの知人のチャールス・カウデン・クラーク（Charles Cowden Clarke）が1810年から使用していた抜き書き帳にあると指摘し、リー・ハントがこの抜き書き帳を1816年に借り、その後再び1818年の夏に借りたのではないかと推察している（Barnard 71）。

（6）ジェーン・スペンサー（Jane Spencer）はこの作品が英国国教会の『公開問答』のパロディであると述べている。

引用文献

Barker, G.F.R. “Gibbs, Sir Vicary.” *Oxford Dictionary of National Biography*.

https://doi.org/10.1093/odnb/9780192683120.013.10608.

Barnard, John. "Charles Cowden Clarke's 'Cockney' commonplace book." *Keats and History*, by Nicholas Roe, Cambridge UP, 2007, pp. 65–87.

Carnall, Geoffrey. "Southey, Richard." *Oxford Dictionary of National Biography*. Oxford UP, 2004, pp. 694–700.

Cox, Jeffrey. *Poetry and Politics in the Cockney School: Keats, Shelley, Hunt and their Circle* Cambridge, 1998.

Davis, Michael T. "Tooke, Hone." *Oxford Dictionary of National Biography*. Oxford UP, 2004, pp. 7–15.

Davis, R.W. "Smith, William." *Oxford Dictionary of National Biography*. https://doi.org/10.1093/ref:odnb/25931.

De Montluzin, Emily Lorraine. "Killing the Cockneys: "Blackwood's" Weapons of Choice against Hunt, Hazlitt, and Keats." *Keats-Shelley Journal*, 1998, vol. 47, pp. 87–107. *JSTOR*, https://www.jstor.org/stable/30213200.

Hampsher-Monk, Iain, editor. *Edmund Burke: Revolutionary Writings: Reflections on the Revolution in France and the first Letter on a Regicide Peace*. Cambridge, 2014.

[Hazlitt, William]. "The Courier and "The Wat Tyler." *The Examiner X 1817*. Pickering & Chatto, 1997, pp. 194–197.

[———]. "*Wat Tyler: A Democratic Poem, The Quarterly Review: Article, "On Parliamentary Reform." The Examiner X 1817*. Pickering & Chatto, 1997, pp. 157–158.

Hoadley, Frank Taliaferro. "The Controversy over Southey's "Wat Tyler." *Studies in Philology*, Jan., 1941, vol. 38, No. 1, pp. 81–96. *JSTOR*, https://www.jstor.org/stable/4172516.

Hoppner, John. "Porson, Richard." *Oxford Dictionary of National Biography*. https://doi.org/10.1093/ref:odnb/22550.

Hunt, Leigh. "Attack on the Prince Regent, and a Word on Two of Plain Comment Upon it." *The Examiner X 1817*. Pickering & Chatto, 1997, pp. 65–66.

———. "Disturbances in the Metropolis." *The Examiner IX 1816*. Pickering & Chatto, 1997, pp. 769–770.

———. "The Examiner: London, March 16." *The Examiner X 1817*. Pickering & Chatto, 1997, pp. 171–172.

———. "On the Proposed Suspension of the Habeas Corpus Act: To the English People." *The Examiner X 1817*. Pickering & Chatto, 1997, pp. 129–131.

———. "Z." *The Examiner X 1817*. Pickering & Chatto, 1997, pp. 788.

[Hunt Leigh]. "The Examiner. London, December 8." *The Examiner IX 1816*. Pickering & Chatto, 1997, pp. 772–773.

[———]. "A New Catechism for the use of the Natives of Hampshire, Necessary to be had in Sites. By the Late Professor Porson." *The Examiner XI 1818*. Pickering & Chatto, 1998, pp. 548–549.

[———]. "The Riots." *The Examiner IX 1816*. Pickering & Chatto, 1997, pp. 778–781.

[———]. "Sketch of the History of the Good Old Times." *The Examiner X 1817*. Pickering & Chatto, 1997, pp. 228–230.

[———]. "To Z." *The Examiner X 1817*. Pickering & Chatto, 1997, pp. 729–730.

Jay, Mike. *The Unfortunate Colonel Despard: And the British Revolution that Never Happened*. Robinson, 2019.

Kucich, Greg and Jeffery N. Cox, editors. *The Selected Writings of Leigh Hunt*. Pickering and Chatto, 2003.

Madden, Lionel, editor. *Robert Southey: The Critical Heritage*. Routledge, 2014.

Morrison, Robert and Daniel S. Roberts editor. *Romanticism and Blackwood's Magazine: 'An Unprecedented Phenomenon.'* Palgrave Macmillan, 2013.

Pig Meat, Professor Porson's Catechism for the Swinish Multitude, A Dialogue on Monarchies and Republics, and the Parable of the Bees. London: R.E. Lee, [1840].

Reiman, Donald H. editor. *Shelley and his Circle 1773–1822*. Harvard UP, 1973.

Roe, Nicholas. "Introduction: Leigh Hunt's track of radiance." *Leigh Hunt: Life, Poetics, Poli-*

tics, by Nicholas Roe, editor. Routledge, 2003.

———. *John Keats and the Culture of Dissent*. Clarendon, 1997.

Southey, Cuthbert, editor. *The Life and Correspondence of Robert Southey*. Vol. 4. London: Longman, 1850.

[Southey, Robert]. "Art. XI. 1. *An Inquiry into the Causes of the General Poverty and Dependance of Mankind; including a full Investigation of the Corn Laws*. By William Dawson. Edinburgh, 1814. 2. *A Plan for the Reform of Parliament, on Constitutional Principles*. Pamphleteer, No. 14. 3. *Obervations on the Scarcity of Money, and its effects upon the Public*. By Edward Tatham, D.D. Rector of Lincoln College, Oxford. 1816. 4. *On the State of the Country, in December*, 1816. By the Right Hon. Sir John Sinclair, Bart. 5. *Christian Policy, the Salvation of the Empire. Being a clear and concise Examination into the Causes that have produced the impending, unavoidable National Bankruptcy; and the Effects that must ensure, unless averted by the Adoption of this only real and desirable Remedy, which would elevate these Realms to a pitch of Greatness hitherto unattained by any Nation that ever existed*. By Thomas Evans, Librarian to the Society of Spencean Philanthropists. Second Edition. London, 1816. 6. *The Monthly Magazine*. 7. *Cobbett's Political Register*." *Quarterly Review*. Vol. 16, 1817, pp. 225–279.

Spencer, Jane. *Writing about Animals in the Age of Revolution*. Oxford UP, 2020. (Kindle edition)

Stephens, H.M. "Despard, Edward Marcus." *Oxford Dictionary of National Biography*. https://doi.org/10.1093/odnb/9780192683120.013.7548.

Timbs, John. *Anecdote Lives of Wits and Humourists*. London: Richard Bentley and Son, 1872.

Vindex, "Mr. Coleridge and Mr. Southey". The Examiner X 1817. Pickering & Chatto, 1997, p. 211.

Wu, Duncan. *William Hazlitt: The First Modern Man*. Oxford UP, 2010.

Z. "Administration of Justice." *The Examiner IX 1816*. Pickering & Chatto, 1997, p. 795.

———. "On the Cockney School of Poetry. No. 1." *Blackwood's Edinburgh Magazine*. Vol. 2, 1817, pp. 38–41.

———. "On the Cockney School. No. VII. Hunt's Art of Love." *Blackwood's Edinburgh Magazine*. Vol. 8, 1822, pp. 775–784.

———. "Letter from Z. to Mr Leigh Hunt." *Blackwood's Edinburgh Magazine*. Vol. 2, 1818, pp. 414–417.

———. "Letter from Z. to Leigh Hunt, King of the Cockneys." *Blackwood's Edinburgh Magazine*. Vol. 3, 1818, pp. 196–201.

エドマンド・バーク『フランス革命についての省察』中野好之訳、岩波文庫、2000 年。

川北稔　編『新版　世界各国史　イギリス史』山川出版社、2011 年。

ポール・ラングフォード編　鶴島博和監修　坂下史監訳　『オックスフォード　ブリテン諸島の歴史　第 8 巻　18 世紀 1688 年—1815 年』慶應義塾大学出版会、2013 年。

Abstract

Leigh Hunt and the Cockney School of Poetry Criticism

Mitsuki EZAWA

In 1817 John Gibson Lockhart started to attack Leigh Hunt in *Blackwood's Edinburgh Magazine* under the pseudonym Z. He ridiculed Hunt and his companions as the Cockney School of Poetry. Many critics have discussed a series of attacks from the point of view of class apathy. For example, Emily Loraine de Montluzin made a noteworthy remark on fear that Tory elite felt when their privileged territory was intruded by lower-class writers. Following her idea, Jeffrey N. Cox steps further, and he admits cultural battle which were fighting over Lake Poets between Hunt and conservative writers. Although Lockhart contrast Wordsworth with Hunt in the first Cockney review, now we should pay more attention to Southey. Since he was expected to compose poems for court or national occasion as a poet laureate, the sudden reveal of his radical poem "Wat Tyler" in 1817 was a serious blow both for him and for government. In this situation, Hunt dared to publish Hazlitt's harsh review in his *Examiner*.

As for Southey's response to Hunt, there has been few opportunities to discuss. However, through this study, I found Southey criticized Hunt in his conservative article on parliamentary reform which Hazlitt used in the above cited review. I also found "Z" criticized Hunt from the same standing point in the *Examiner*. Furthermore, I noticed "Z" problematized Hunt's political standing points in his open letters to him. From the things I mentioned above, I reexamined the meaning of the criticism which Tory supporters made against Hunt.

人文・自然研究　第 17 号